

## The Institute for World Literature 2016 参加記

ボストン 2016

2016 年 6 月 20 日～7 月 14 日

於 ハーヴァード大学

阿部 幸大（東京大学英文科博士課程）

ハーヴァード大学比較文学科のチェアであるデイヴィッド・ダムロッシュ教授が主宰する The Institute for World Literature（以下 IWL）という研究組織は、1 ヶ月間のサマー・プログラムを 2011 年から継続して開催しており、IWL という名称は、研究組織そのものというよりも、実質的には上記のイベントを指している。同プログラムは毎年開催地を違えてきたが、第 6 回の開催になる 2016 年度は、3 年ぶりに、ふたたびお膝元のハーヴァード大学で行われた。ちなみに 2017 年は韓国での開催と聞いていたが、公式 HP を覗いてみると、どうやらコペンハーゲンに変更されたようである。

ところで、想像するに、『れにくさ』という媒体に掲載される拙稿に目を通されている人の中には、IWL への参加をわりあい具体的に検討している読者も少なくないだろう。本稿はそのような読者に、具体的かつ直接的に役立つような内容を目指したい。現代文芸論研究室にゆかりのある人々による IWL への参加記については、2013 年のハーヴァードに参加した秋草俊一郎さんが『翻訳研究への招待』の第 13 号に「ある夏の日の報告——IWL に参加して」と題された詳細なレポートを（ネット上で読むことができる）、また『れにくさ』第 6 号には、2014 年の香港に参加した三宅由香さん、2015 年のリスボンに参加した山田美雪さんが、それぞれ書いておられる。そちらも是非参考にしてほしい。

さて、IWL への参加は、まずオンラインで出願の手続きを行うことから始まる。大学院へのアプリケーションと同じだ。ここで注意しなければならないのは、出願時に英文の Sample Writing と Statement of Purpose の提出が求められるという点である。とくに前者は、ふつう英語論文をすぐに用意することは難しいだろうから、事前に準備しておく必要がある。また、IWL では 2 週間のセミナーを 2 セット受講することになるが、受講したいセミナーの志望順も出願時に問われることになる。たとえばダムロッシュ先生の授業などは人気が高く、第一志望に選んだものの抽選で外れてしまったという人は多いようである。また今年度からはセミナーだけでなく、“Politics, Poetics & World Literature” や “World Literature & Cinema” といったタイトルの冠されたコロキウムへの参加も義務づけられた。これは参加者が自主的に組織する勉強会のようなもので、それぞれのコロキウムにおいて（多くはポスドクの）参加者ひとりが立候補して司会進行役を務め、各参加者は自分の研究についての発表を求められる。出願時には参加したいコロキウムも選択することになる。

出願が済むと、後日、プログラムへの参加が許されればだが、セミナーの配属が通知され、さらに、各セミナーの Course Pack すなわちリーディング・リストが PDF で送られてくる。これはセミナーにおいて用いられる教科書と言っていいのだが（現地では改めてハードコピーが配られる）、1日に読まなければならないアサインメントの量が英文にして 50-70 ページほどあり、多くの日本人の参加者にとってはそれを授業前日に毎日ていねいに消化するのは厳しい。しかし、やはり全体を読んで授業に出席しなければ授業内容の理解度が下がってしまうし、ディスカッションに参加するのも難しくなってしまう。現地に行く前に読めるものは読んでしまい、和訳のあるものをチェックするなどして、なるべく参加期間中の負担を軽減しておくのが望ましいと個人的には思う。

また、現地での宿泊施設も IWL が斡旋してくれるが、これは値段をふくめ、開催地によって大きく異なるだろう。今回はハーヴァードの寮がいっぱいだったようで、ボストン大学（BCではなく BU）の寮を借りていた。ちなみに私の部屋は 1 つのスイートに 3 つの 2 人部屋がくっついたもので、週末はルーミーとビールを飲みつつ文学談義——だったかどうか——に花を咲かせた。また、参加者のなかには現地の友人に居候させてもらっていた人もおり、そういったツテを利用するのもひとつの手だろう。

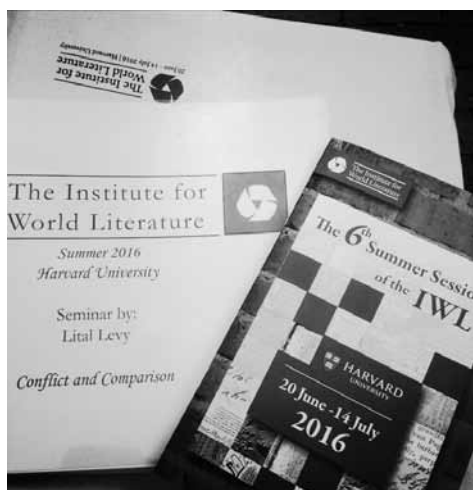
現地での実際の活動については、右に第 1 週のスケジュールを載せたので参考にして頂きたいが、簡単にまとめると、(1) 月—木の 14:00-1600 に各教室で開かれるセミナー、(2) 週にいちど午前中にコロキアム、(3) 週に 1-2 回セミナーのあとに大きな会場で行われる全員参加のレクチャー、(4) その他のレクリエーション、といった具合である。

さて、参加記らしい内容も簡単に述べておこう。まず初日には登録手続きがあり、リーディング・リスト、プログラム、それから記念のバッグと T シャ

ツが配布される（次頁左上図）。各年によって変化があるとおもうが、2016 年の場合は、その後キャンパス・ツアーと記念写真の撮影があった。次頁右上は写真撮影のためにハーヴァードの総合図書館であるワイドナーの前に集まった約 150 人の IWL 参加者たちである。IWL は他ではまず望めない質と量の人脈作りが期待できる機会なので、積極的かつ友好的に振る舞うほうが得である——ふだんはそうでない私やあなたも。

セミナーについては、私は前半はプリストンの Lital Levy 先生による“Comparison and Conflict”に、後半はハーヴァードの Mariano Siskind 先生による“Cosmopolitanism and Its Discontents”に配属された。幸いにしてどちらも第一希望である。前者は中東を中心としながらも戦争文学を広く扱う授業であったが、戦争文学というテーマで目下アメリカの大学院の比較文学科への出願を進めている私は、戦争が比較文学・世界文学研究という領域に相応しいテーマ

	Mon	Tues	Wed	Thurs	Fri
	6/20	6/21	6/22	6/23	6/24
<b>Week 1</b>					
9:00-11:00	Registration	Library Cards	Library Cards	Library Cards 10:00-10:30 Library Tour G1	10:00-10:30 Library Tour G3
11:00-1:00	Campus tour	Colloquia (1-6)	Library Cards	Colloquia (7-11)	12:30, 1:45, 3:15pm
1:00-2:00	Lunch break	Lunch break/ Library Cards	Lunch break	Lunch break 1:30-2:00 Library Tour G2	Isabella Gardner Museum, 3 groups
2:00-4:00	Seminars	Seminars	Seminars	Seminars	
4:30-6:00	Opening Lecture: David Damrosch Group Photo	4:00-6:00 Library Cards	Library Session	4:00-6:00 Library Cards	
6:30-6:00-9:00		Reception/ Dinner Harvard Museum of Natural History			



であることを再認識したいっぽうで、しかし比較という行為はときに忘却と暴力に転化しうるという困難と、比較文学者が引き受けねばならない倫理をも学ぶことになった。また後者の授業（右図）では、カントから始まってコスモポリタニズムの系譜を辿った。アメリカの比較文学科というのは「作品Aと作品Bを比較する」場所であるというよりは、単に哲学と批評理論をゴリゴリと研究する場所なのだ——とはよく聞かされていたが、そのことを実感できる授業であった。Siskind先生からは、授業ではコスモポリタニズムという大きなタームを用いて時代や地域を跨いだダイナミックな研究を行うことの面白さを教わり、またオフィスアワーに訪



問した際にはアメリカの大学へのアプリケーションのアドバイスなども頂くことができた。このように現地の先生と直接話ができる機会は——特にアプリケーションの具体的な内容については——そうそう得られるものではないので、これから参加を検討している人はぜひそうしたチャンスも活かしてほしい。

さて、最後になったが、IWLは、世界文学研究者が文字どおり世界中から大勢集う稀有な場である。その無尽蔵なまでの多様性は、いっぽうでわれわれに自由の感覚を与えてもくれるのだが、しかし翻って、自分はなぜそこにいるのかという自問へわれわれを導くようにも思われる。“What Is World Literature?”という問いに答えることもむろん大切だが、しかしそれ以前に、そもそもわたしはなぜ世界文学を——あるいは現代文芸論を、でもいい——研究したいと望むのか。その研究によって、何をどうしたいのか。そういった根本的な問い、すぐには答えられないかもしれないがつねに考えつづけねばならない問いにあらためて向き合う機会と回答のヒントとを、IWLはその参加者全員に与えてくれる。そのチャンスを活かすかどうか、それはあなた次第である。